

目指す学校像	第一希望の進路実現のために必要な学力や知識を身につけさせるとともに、実践をとおして豊かな人間性を磨き、Society5.0の時代を迎える厳しい社会の中でたくましく生き抜くために必要な資質や能力を身につけさせる学校づくりを目指す。
--------	--

重点目標	AIの時代だからこそ必要とされる「人間力」を育てる 1 科学的思考力の育成 2 英語力を鍛える教育の徹底 3 コミュニケーション能力の強化 4 徹底した論理的思考力の育成 5 第一希望の進路実現 6 リモート教育の実践
------	---

達成度	
A	ほぼ達成 (8割以上)
B	概ね達成 (6割以上)
C	変化の兆し (4割以上)
D	不十分 (4割未満)

出席者	
学校関係者	3名
事務局(教職員)	4名

学校自己評価

年度目標		令和3年度評価		学校関係者評価	
		中間 (9月18日現在)	年度末 (3月19日現在)		実施日 令和4年3月19日

番号	重点目標(評価項目)	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の進捗状況	達成度	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	教科横断的思考力の育成	AIの時代に立ち向かっていくための総合的な視点に立った思考力が十分に身につけていない。 ・体験的な実践が十分ではない。 ・研究施設や博物館を訪問しての学習が十分ではない。	埼玉大学STEM教育センターとの連携によるSTEM教育の推進する。 ・サイエンスイノベーションの取組として、近隣(高麗川)での水質調査を実施する。 ・地球観測センターへの訪問学習を実施する。	・STEM教育の成果 ・STEM教育の中で考案・作成したものの発表の成果 ・サイエンスイノベーションの取組内容と成果 ・施設訪問学習のレポート	・中1：基本的なプログラミングを学習し、扇風機を作成。 ・中2：生活の上で役立つ物を考案して、自動ドアの仕組みを用いた物を製作。 ・中3：Scratchのデータ出力、CSV出力、EXCELでのデータ整理を学習し、レポートの書き方を習得した。 ・坂戸市城山付近と毛呂山町大類付近の高麗川の水質調査を実施。	A	・中1：2学期には光センサーを利用した走行型ロボットを作成し、3学期には抵抗センサーを利用した体感型ゲームを製作した。 ・中2：2学期、3学期にボールを回収するロボットを作成し、そのコネクタも実施した。 ・中3：2学期には会話するプログラムを作成し、3学期には光センサーを用いた光学認識の基礎を学習し、バーコードリーダーの仕組みを理解した。 ・新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて訪問を中止した。代替行事として、カルビー(株)北海道千歳工場のわいわい工場見学会を実施した。	A	・STEM教育の1期生は3年間の完成年度を終え、プログラミングを中心とした教科横断的な教育の実践ができた。次年度からも引き続き、埼玉大学STEM教育センターの協力のもと、時代の流れを見越した取り組みを実施していく。 ・コロナ禍での状況をみながら、校外でできる調査活動等を充実していく。 ・コロナ禍での状況をみながら、研究施設等の訪問ができるように企画していく。	・埼玉大学と連携しているSTEM教育は小学生の保護者に対して訴求効果のある取り組みである。 ・子供たちが社会に出た後に、身につけておいて良かったと感じられる技能である。 ・天候の影響でうまく結果を出せなかった水質調査は、本来のあるべき結果を生徒達に伝えてから終了するべきであった。
2	英語力を鍛える教育の徹底	スピーキングとライティングの力が十分に身につけていない。 ・英検で全員が目標級に合格できるようにすることが課題である。 ・海外の学校との交流を広げ、生きた英語に触れる機会を増やすことが課題である。	・English Station(英会話サロン)で検定のスピーキング対策を取り入れた会話練習を実施する。 ・英語絵日記を書かせることでライティングの力を身につけさせる。 ・学年縦断型の英検対策授業をさらに充実させ、それぞれの生徒の目標級合格を目指す。 ・時差が少ないオーストラリアの学校との交流を広げ、オンラインでの英会話を実施し、一人ひとりの生徒が生きた英語に触れる機会を増やす。また、アメリカの学校とは手紙等の交換などで交流を深めていく	・英検の合格者数の結果 ・GTECの結果 ・海外の学校との連携	・英語検定の3級～準1級受検生の2次面接試験の練習を実施。1次試験合格者の全員が2次試験に合格した。 ・6月に実施した高3生のGTECでCEFR-J LEVELでB1ランクを得た生徒が成績優良賞を受賞した。 ・5月の英語検定の前に学年縦断型で級ごとに過去の問題を使用した対策授業を実施することができた。 ・以前訪問していたオーストラリアのファームのオーナー家族とオンラインでの英会話の機会を設け、日本とオーストラリアの文化の違いを学習	A	・English Stationを休みや放課後に利用した英語検定の2次面接練習の成果で、第2回・第3回に2次面接を受検した生徒は全員が合格した。 ・12月に実施した中学生のGTECでCEFR-J LEVELでB1ランクを得た中学生3年生が成績優良賞を受賞した。 ・今年度より中学1年生もGTEC JUNIOR(Junior Plus)を全員が受検するようになり、タブレットを使用しての検定を体験した。 ・オーストラリアのファームのオーナー家族と月に1度のオンライン英会話を実施し、文化の違いを学ぶことに加え、アメリカ合衆国ワイオミング州の大学の先生ともオンライン英会話を実施し、アメリカの文化についても学習することができた。	A	・英検2次試験対策でのEnglish Stationを活用した面接練習の成果で、2次試験の合格率はほぼ100%に近い結果を出しているのは素晴らしい。 ・今年度初めて中学1年生で導入したGTEC JUNIORはすべてタブレットを使用する新しい4技能タイプの検定であり、導入的な検定としては利用しやすかったため、来年度も実施していきたい。 ・オーストラリアやアメリカとのオンライン英会話を定例化し、自分の考えを英語で相手に伝える機会を増やしていく。 ・東京グローバルウェイなどの国内の英語施設を活用することを企画していく。	・海外とのオンライン英会話を定期的に行う実践できていることはとても素晴らしい。海外に行くことが難しい現在何物にも代えがたい取り組みである。保護者が私立学校に入学させる大きな理由の一つが海外との交流である。このような交流を自分でできているのが大きなメリットである。 ・英検の2次試験の合格率が高いのには感心する。日頃からの対策の成果が出ている。 ・英検の学年ごとの目標を設定し、目標達成を目指した取り組みを行っていただきたい。
3	コミュニケーション力の強化	自分の考えを表現する「言語力」をしっかりと身につけることが課題である。 ・人前で自分の考えを適切に伝えられる力が十分に身につけていない。 ・講話などで聴いた話に対し、自分の考えを持てるようになることが課題である。 ・日本語検定において全生徒の合格に向けて、対策指導の時間を確保することが課題である。	・ノルディスコラ手帳の活用をさらに徹底し、日記の習慣を定着させる。 ・研究発表会で自分の考えを豊かな表現で発表できるように指導していく。 ・自分の考えをクラス内で伝えられる機会を増やし、主体的に学ぶ力を育成する。 ・講話や諸行事等での感想文指導を強化していく。 ・授業の中で対策のための時間を工夫していく。	・ノルディスコラ手帳の記録 ・研究発表会の成果 ・「主体的・対話的で深い学び」の実践 ・諸行事での感想文の成果 ・日本語検定の結果	・文化祭で「校内手帳甲子園」を企画し、日記の習慣を身につけさせた。 ・「卒業生を囲む会」や「オンライン工場見学」での話に対し、感じたことを感想文にまとめることができた。 ・国語の授業内で対策学習の時間を取った。 ・日本語検定2級に合格した中学3年生の生徒が「時事通信賞 最優秀賞」を受賞した。	A	・生徒には毎朝手帳を提出させ、下校までに担任がチェックして返却して指導していく。日記欄に自分の意見を書いていくように助言していく。 ・道徳の授業で取りあげられたテーマごとに各自が感じたことを文章に書いてまとめることができた。 ・国語の授業内で対策学習の時間を取った。 ・日本語検定2級に合格した中学3年生の生徒が「時事通信賞 最優秀賞」を受賞した。	A	・毎日欠かさず日記をつける習慣が身につくよう継続して指導していく。日記欄に自分の意見を書いていくように助言していく。 ・道徳の授業内で自分の考えを発表する機会を設け、諸行事や講演会の感想も文章でまとめられるように指導していく。 ・自分の意見を相手に伝え、また、相手の意見聞きコミュニケーション力を身につけさせる機会を設けていく。 ・日本語検定では来年度もそれぞれの生徒が目標とする級に合格できるように指導していく。	・ノルディスコラ手帳の活用は社会生活で重要なことになっていく。日記欄に自分の意見を書いていくように助言していく。 ・手帳の活用が上手にできるようになれば、自己管理能力が身につくようになる。 ・自分と相手と伝えられる能力を身につけることは大切なことである。
4	徹底した論理的思考力の育成	生徒のプレゼンテーション能力を一層向上させることが課題である。 ・将来の大局的な視点に立った経営的な手法が十分に身につけていない。 ・教科横断的な思考力が十分に身につけていない。	・研究発表会の準備を6月からスタートさせ、指導する。(再掲) ・聴衆の前で発表できる技術力と組み立て方法を育成する。 ・経営シミュレーションゲームのCAPSを通して利益を出すための論理的な思考を鍛える。 ・STEM教育を通じた論理的思考力を育成する。(再掲)	・研究発表会におけるプレゼンテーション ・CAPSの取組みの結果 ・STEM教育の成果 ・大局的なものの見かたの定着度 ・俯瞰的で、先を読んだものの見かたの定着度	・オンラインを利用し、密にならずにCAPSを実施することにより、論理的な思考力を高め、いかに利益を出していくかという経営感覚を体感することができた。 ・音センサーや光センサーの仕組みを理解することにより、論理的に物の製作ができるようになった。	A	・研究発表会では、多くの生徒が発表の構成をしっかりと組立てながら、自身の見解を論理的にまとめたプレゼンテーションをすることができた。また、保護者に対してはYouTubeを活用した配信をすることができ、生徒が発表する姿を自宅で見ることができた。 ・新型コロナウイルス感染症の影響で、CAPSが2学期に十分に実施できなかった。	A	・研究発表会ではそれぞれの生徒の発表内容及び発表時の姿勢の更なる質の向上を目指したい。また、来年度もYouTube配信を実施していきたい。 ・STEM教育では、さまざまなプログラミングの原理を理解しながら、論理立った製作ができるように指導していきたい。 ・来年度はCAPSの実施のための十分な時間を確保し、経営についての論理的な思考を養ってほしい。	・パワーポイント(グループスライド)を中学生の講師に使いこなせる能力を身につけてほしい。また、来年度もYouTube配信を実施していきたい。 ・研究発表会のYouTube配信は、コロナ禍で保護者に配慮した学校側の努力が感じられる取り組みである。
5	第一希望の進路実現	自分の適性や力の把握が充分にできていない状況である。	・職業に対する意識を高め、仕事の具体的な内容について探求する姿勢を持たせる。 ・オンラインでの企業見学を通して、自分の将来を見つめさせる。 ・卒業生の体験談を聞く。 ・スタディサプリを活用する。 ・学習支援センターを活用する。	・進路意識の定着 ・キャリアに対する意識を持たせる行事の企画 ・「卒業生を囲む会」の企画 ・進路実績	・社会人になった卒業生(金融業、建築業、地方公務員)にオンラインで参加していただき、仕事の話を中心に話を聴くことができた。	A	・本校の卒業生がキャリア教育の助成を受けている嘉悦大学の協力を得て、大学生から学年ごとにテーマに沿ったキャリア学習会をオンラインで実施することができた。 ・学習支援センターを利用する中学生の数が少しずつではあるが増えてきている。	A	・来年度は「卒業生を囲む会」の趣向を変えて、中学生向きの内容に工夫していきたい。 ・大学との連携を継続して、キャリア学習会を企画していきたい。 ・今年度は有識者の講師の方の講演が実施できなかったため、来年度は実施していきたい。 ・少人数ながら、GMARCHレベルの大学の合格を多数出せた進路実績を中学生達の進路指導に活かしていく。	・今年度はGMARCHを中心に多くの大学合格者を出すことができたと感じる。一般受験での合格者数が増えているので素晴らしいと思う。 ・嘉悦大学の土橋先生の講演は会社の社員教育にも活用できるような素晴らしい内容なので毎年すべての学年に伝えるべきである。 ・生徒達が具体的な将来像が見えてくるような取り組みができているように感じる。
6	リモート教育の実践	コロナ禍の新しい生活様式で、インターネットを通してオンライン授業を実践していくことが課題である。	・感染症の拡大状況によって、Google MeetやZoomを使用したオンライン授業が実践できるように準備していく。 ・学校行事のリモート化の可能性を探る。	・オンライン授業に切り替えられるよう準備していく ・卒業生を囲む会などをリモートでの取り組み	・1学期はオンラインで「卒業生を囲む会」や「工場見学会」を実施することができた。(再掲)	A	・Google Meetを使用したオンライン授業を3学期に約1週間実施した。また、学級閉鎖になったクラスに対しても、期間内毎日6時間オンライン授業を実施した。 ・3学期にはオンラインで「工場見学会」、「保護者会」、「研究発表会」を実施することができた。	A	・コロナ禍で企業や施設への訪問が難しくなっているが、オンラインで参加可能な工場見学会等を定期的に実施していく。 ・オンライン授業がいつでもできる体制を整え、さらに教員のオンライン授業の質の向上を目指していく。	・日本社会の全体がリモートにシフトしてきているなか、早期から研修を実施していることに感心する。 ・コロナの影響が長引くなか、リモートと対面のハイブリッドでの対応がいつても必要のように準備していく必要がある。

*STEM教育とは、アメリカのオバマ前大統領が推進した教育システムで、これからの時代を担う子どもたちに必要な資質を統合的に身に付けさせていくという先進的な取組です。「STEM」とはScience(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Mathematics(数学)のそれぞれの単語の頭文字をとったものです。この教育は創造、変革、問題解決に必要な力を育てるもので、単なる理系科目教育やプログラミング教育ではなく、教科横断的に取り組み、社会や創造性と密接に結びついた生徒の主体性を育む総合的な教育システムです。